

大学新旧比較私見---オックスフォードとSFC

研究活動のために、いま(二〇一一年春)英国のオックスフォード大学に滞在している。約八十年前に創立をみたこの大学は、英国で最古の歴史を持つだけでなく、全世界でも最も古い大学の一つに属するものである。一方、筆者が日本で所属する大学のキャンパス(慶応義塾大学の湘南藤沢キャンパス、略称SFC)は、一年余り前に創設されたいわば新顔の大学である。同じ大学とはいっても、これだけケタ外れた歴史をもつ二つ社会的組織を比較することは、無謀のそしりを免れまい。だが、オックスフォードで半年足らずの間に垣間見たことがらをもとに、両者を比較しつつ若干の感想をあえて記してみたい。

タイムカプセル、西洋史の集積体としてのオックスフォード大学

当地に滞在してまず第一に感じることは、「大学」とは単に研究と教育を任務とする機関である、と捉えたのでは狭きに失することだ。つまり、大学という概念には大いに幅広さがありうる。もとよりオックスフォード大学も、研究と教育がその大きな柱であることに変わりはないが、同大学はむしろ、長年の歴史の過程で成立した組織や慣行の集積体であり、またそこでの各種活動にもそのことが深く反映した一つの文明体である、あるいは新旧両世代の学者や研究者・学生がともに暮らす共同体である、と捉えるほうがここでは実体により則している。つまり、鳥居塾長がよくいわれるように、「文明の継承」が大学の役割のひとつであることが実感できる。

大学全体を構成する学寮(カレッジ)・食堂・礼拝堂などの建築物も、数百年にわたるそれぞれの時代のものが現在一度に見られるので、ここでは、西洋建築史の八一年余りが封じ込められたタイムカプセルを覗き込む感じがする。そして、歴史上の偉人、例えばホッブス(哲学者)、ボイル(物理学者)、ハレー(天文学者)、セシル・ローズ(政治家)らがその若い時に勉強し思想をつむぎ出したのと同じ建物や寮に入って学生が勉強するか、あるいは作曲家ヘンデルやハイドンが自作の曲を演奏した大講堂で今なおコンサートを楽しむなどといったことがここでは大学生の生活になっている(このコンサートには筆者もよく出かける)。そうした場合には、大学での勉強は、これまで何世代にもわたって継承されてきた歴史に自ら加わることをひしひしと感じさせることになる。筆者は、かつて米国や豪州の幾つかの大学で教壇に立った経験があるが、大学にいただけでそのような歴史への参画をいやおうなく感じさせられたのは今回が初めてである。

第二の感想は、上記を反映して、大学のあり方に関して西洋中世からの伝統が色濃く

残っていることだ。一つは、学生は先達学者と同じ屋根の下に住んで勉強し、研鑽を積み、そして人間関係を形成するという仕組みになっていることである。つまり、カレッジという三 - 四 人を単位とした独立の学寮と塾を兼ねた建物および組織がここでは基本となっている。そしてもう一つは、大教室での講義はあくまで補完的な位置付けにとどまっていることである。例えば、学生には講義への出席義務がなく、また履修申告の手続きや履修者リストといったものも存在しない。教育においては、それらよりもむしろ、よく知られているようにチュートリアルという制度、すなわち少人数(一名ないし数名)が週一回、指導教官と一時間直接向かい合って毎週の宿題の報告と討議を行うことが中心に置かれていることである。これは、人手とコストのかかる贅沢な教育方式ではあるが、当大学が決して譲歩しない大きな特徴点とされている。

こうしたことから、オックスフォード大学では、全学生約一万六千人のうち、約七割の一万一千人が学部学生であり(大学院生は約五千人と約三割に過ぎない)、大学院生が過半を占める米国の多くの有力大学の場合とはかなり対照的である。なお、男女比率は、六対四と共学化が進んでいる。

第三の感想は、こうした大学の各種制度には長い歴史があることから、ユニークで興味深い、そしておごそかな(見方によってはユーモラスな)制度や慣行も少なくないことだ。これらは、歴史を尊重するという英国人特有の気質によるためでもあろう。まず、カレッジ(学寮を中心に据えた学院)とユニバーシティ(大学)という二重構造がその典型である。すなわち、カレッジはユニバーシティから独立した一つの基本的単位となっており、これが入学選抜、チューターによる教育、図書館や寮などの建物の維持、資金獲得などを独自に実施している。そして、ユニバーシティはそうしたカレッジをある種の側面において統合する中央組織として存在しているに過ぎない。つまり、ユニバーシティの主たる機能は、教育それ自体ではなく、カリキュラムの編成、期末試験の実施、学位の授与などである。つまり、ここでは、ユニバーシティとは、カレッジをメンバーとするいわば複雑な「連邦制度」を構成している、と理解できる。

また、教員や学生は、入学式と卒業式に際しては、中世ヨーロッパで地位と職業を表すものであったガウンをそのランクに応じて身に付けることが義務づけられているだけでなく(米国でも卒業式のガウン着用は一般的であるが)、学部学生は卒業試験(それは試験専用の校舎で実施される)を受けるときにもガウンを着用するといった勿体ぶったことをしなければならない規則になっている。そして、入学式のほか、特に六月下旬に行われる名誉博士号の授与式(今年はアナン国連事務総長ほかに授与された)においては、儀式は英語でなくラテン語でうやうやしく取運ばれ、その当日、関係者はガウンを着用

したまま市中行進をするので、まさに時代絵巻を見るがごとくである。

さらに、カレッジの責任者(米国では dean に相当)に関する呼称もカレッジ毎に様々であり、合計なんと七つもの異称がある(Warden, Master, Principal, President, Rector, Provost, Dean)。もうひとつ付け加えるならば、あるカレッジでは、その創設者によって一四世紀に作られた規定にしたがい、毎日の夕食の招集はトランペットを合図としてなされる例もあるとのことだ(筆者はまだその場面に出会ったことはないが)。

第二の改革を進めるSFC

このようにユニークな点の多いオックスフォード大学は、斬新な構想をもとに創設されたSFCとは違う面が多いのは当然のことである。

ところで、そのSFCは、これまで一年の経験と教訓を踏まえて今、研究および教育のあり方について第二段階の改革を実施しつつある。創設当初は、確かにコンピュータ・ネットワークを大学の中心的インフラストラクチャーに据えることだけでも斬新性があったが、今やそれだけではほとんど意味がない。このため、SFCはいま教育カリキュラムの抜本的改正というかたちをとって、新しい実験を開始している。これを「SFCバージョン二」¹と称するゆえんである。それは、グローバル化とデジタル化という時代変化への対応、学部と大学院の一体化、教育と研究の間の制度的矛盾の解消、などを指すものである。これに応じてカリキュラムも、研究プロジェクトの重視、フレキシブルな履修体系、クラスターによる専門領域ナビゲーションシステムの導入、などを今年度からスタートさせている(詳細は http://www.sfc.keio.ac.jp/visitor/about_sfc/index.html に掲載されている)。

これらのシステムは、チュートリアルを中心に据え、基本的には標準的な学問領域の中で一つの絞り込んだテーマを深く学ばせるというオックスフォード大学(そうした基本方針を今後とも踏襲することは同大学の学内報告書でも再確認されている)とは、手法の面で全く異にするものである。ただ、オックスフォードの方式には、確かに優れた面が多い一方、チュートリアルと講義の連携不足、カリキュラム組立てという視点の欠如、などの問題点も指摘されており、今後その改善を追及していけば、ある程度はSFCの行き方と共通点が出てくるのかもしれない。

思わぬ点でSFCとの類似点も

オックスフォードでの教育とSFCの新カリキュラムに共通している重要な点もいくつかある。その第一は、学生の自主性および感性を向上させることが教育において極めて重

要であるという考え方であろう。オックスフォードを特徴づけるチュートリアルや人文系科目の重視は、これらに資する面が大きい。

一方、SFCにおいて研究プロジェクトを重視するとともに、履修体系を大幅に弾力化した(履修科目の学年別区分は原則的に廃止した)のは、自主性の涵養、つまり受け身型教育への訣別を表わすものである。また、単に論理的思考力を強化させるにとどまらず、ものごとを大きく感覚的に感じとって構想する手法やそうした能力(広い意味でのデザイン力)の向上に関する教育も今回新たに加えている。これは、情報の収集自体はいまやインターネットを利用すれば造作もないこととなったが、そうした世の中においては、豊かな感性と発想力がなければ人間は単に情報処理機械になってしまうという問題に対応する必要がある、との考え方によるものである。このようにみると、両大学は、教育手法の面では大きな違いがあっても、教育においてそれぞれが重要と考える幾つかの点はむしろ類似しているように思う。

研究や教育以外の面でも、いくつか共通点がある。その一つは、両校とも情報技術(IT)の利用を徹底的に進める方針を採っていることだ。SFCが創設当初から情報基盤を前提とした革新的な大学であることは幸いにもよく知られているが、その後においても、学生同士、学生と教員の間、あるいは教員相互間における様々なコミュニケーションはインターネット上で時間と空間を越えて日常的なものとして定着している。また、学生の授業履修の全面的なインターネット申告化、授業における一層のIT化(遠隔講義の導入等)など、IT化の追及にかけては引続きリーダー的存在であり続けたいとの姿勢に変わりはない。

一方、オックスフォードでも、この面ではSFCに勝るとも劣らない対応が進められている。例えば、インターネットの社会的影響や応用技術開発などインターネットに特化した研究を行う欧州随一の研究所を今秋設立することになっている。また、ITで利用可能な各種サービスや情報の種類に関する充実ぶりは、同大学のホームページをみただけでわかる。例えば、学生は、期末試験全科目について過去の問題(但し一九九九年分以降)を図書館からでも学寮からでも直ちにコンピュータの画面に呼び出すことができる仕組みがすでに完成している。また、英国で最も歴史が古く重要な図書館の一つとされるこの大学の図書館の蔵書(約六百万冊)についても、その太宗をなす一九二一年以降の図書についてはすでに全てオンラインでの検索が可能となっている。ちなみに、日本の国会図書館が所蔵する書籍のうちウェブ検索できるのは、和図書(一九四八年以降受入分のみ、約二万件)、洋図書(一九八六年以降受入分のみ、約二万件)ともなお限定的である。

余談だが、この大学の図書館における筆者の著作の有無をウェブ検索したところ、ここには筆者の英文著書や英文モノグラフが合計六点も所蔵されていることを発見、その収集力と整理力の高さに驚いたことである。

いま一つの共通点は、両大学とも、自己点検、あるいは外部による評価を積極的に導入し、大学としての機能の向上、そして組織の効率性およびアカウンタビリティの向上に努める姿勢が明確であることだ。SFCでは、すでに一九九八年に他大学に先駆けて外部による評価を実施した。その評価チームは、学外の有識者七名の委員で構成され、評価の結果や提言はすでに公表されている。そこで提言された内容は、上記の新カリキュラム編成にも一部生かされている。そして、その後は、SFCとして独自の自己点検システムを構築している。

一方、オックスフォードでも、部外者をもメンバーに加えた評価委員会による大掛かりな点検が一九九七年にかけて行われた。その報告書では、実に九十三項目もの提言が取りまとめられている。同大学の上記のようなIT化推進はこの提言を受けた面もある。外部評価であれ、自己点検であれ、こうした評価を積極的に求め、それらをも前進の手がかりにすることは、大学が社会的責任を全うする上で欠かせないことといえる。

社会の長期的先導役としての大学

結局、大学のあり方としては、唯一の理想モデルはないと思う。ただ、IT化、情報化が進んでも、直接顔を合わせる人間と人間との関係は、その基礎になる必要がある。若い世代に対する大学教育とは、そうした状況のなかで、先端的研究を進める者が、学生から探求心、自己向上心を引き出してやることを核心とするものであろう。

大学の役割はきわめて重く、一国がどのような大学をその国の中に持っているかは、その社会の将来を予測するいわば先行指標になる、といえよう。なぜなら、大学は、最先端の知的生産を行う現場であり、そこで作られる知識(研究成果)は長期的に社会を大きく変えていく力をもつからである。また、次の世代を担う若者を預かって教育し、彼らを未来の社会に送り出すからでもある。日本の二、三年先の将来のことを考えるならば、いま日本の大学関係者に求められる責務はとても重いと思う。

(東京大学経済学部卒業生同窓会誌「経友」百五十一号、二〇一一年一〇月)